

〔論文〕

物質代謝の社会哲学

馬 渕 浩 二

目次

- はじめに
 - 1 物質代謝とはなにか
 - 2 資本制と物質代謝
 - 3 エコノミーをエコロジーから見る
 - 4 エコロジーをエコノミーから見る
- おわりに

はじめに

人間は身体である。この事態が人間の存在様式をその根底からつよく規定している。身体であることによって、人間は空気を吸い、そして吐き、水を飲まなければならぬ。あるいは、他の生命を食べなければならない。また、無毛の身体ゆえに、人間はなにかを身にまとわなければならず、雨風をしのぐためにどこかに居所をかまえないければならぬ。こうした事柄を実現するために、人間は他者たちとともに自然に働きかけなければならぬ。よするに、身体であることによって、人間はその身体―生命を維持しつづけなければならず、そのためには対自然的・対人間的関係のなかに入り込まなければならぬ。

身体が、そして生命がこのような対自然的・対人間的関係のなかで持続するとき、つねに物質が移動し変化しつづける。人間が自然から手に入れる物質は、ひとびとのあいだを駆けめぐり、そのうちのあるものは身体に取り込まれたり身につけられたりする。また、あるものは、くりかえし用いられることによって摩滅してゆく。そして最終的には、これらの物質は自然のなかへとふたたび戻ってゆく。あるいは、人間は日々なんども排泄し、みずからの内部の物質を外へとゆだねる。そもそも、物質からなる人間の身体そのものが、いずれは自然へと帰ってゆく。それは身体―物体の定めである。かくして、人間の生の営みは物質の流れと不可分である。別のいいかたをすれば、人間の身体と生命は物質の流れに貫かれている。マルクスはこの物質の流れを物質代謝と呼ぶ。そして、物質代謝という視点から、資本制の特異なありかたを説明しようとしている。本稿の課題は、この物質代謝という概念に注目して、マルクスの思考の特徴をその広がりにおいて描くことである。⁽¹⁾

なお、筆者は拙著⁽²⁾において、生命と身体の社会的生産という問題を論じたことがある。そこでは、おもに生命と身体が社会的に媒介されて生みだされるという側面が強調された。しかし、生命が生産されるためには、すでにの

べたような自然との物質代謝が不可欠である。本稿は、この対自然的関係という視点も加味しながら、生命の社会的生産という問題設定を補足するものでもある。

さいしよに物質代謝概念の、とりわけそれがマルクスによつて用いられるさいの意味を説明する。ここでは、物質代謝が自然的意味をこえて社会的意味をもつことが示されるだろう(1節)。つづいて、社会的意味での物質代謝がいかに機能するのかということを、資本制という文脈において考えてみる(2節)。さらに、物質代謝という概念に注目するときに、現代という文脈において、どのような視座が獲得されることになるのだろうか。そのことが、「エコロジーとエコノミーのあいだ」という視点から考えられることになる(3、4節)。さいごに、これらの考察をつうじて、マルクスの物質代謝の思考が「ホモ・エコノミクス」という語を再定義する可能性を孕むことを結論として示すことになる。

1 物質代謝とはなにか

人間の身体もまた、他の植物や動物とおなじように、一個の有機体である。この有機体としてのあり方が、人間と自然とをさげがたく結びつける。というよりも、人間は自然の一部である。人間と自然との関係の基礎にあるのは物質である。有機体としての身体も、それを取り囲む自然も物質よりなるのであるから。もちろん、たんに物質を集めただけでは有機体とはならないし、だから物質のたんなる集合体には生命が宿らない。だけれど物質がなければ生命の存立は不可能である。そして、まさしく物質から成り立つという事態こそ、身体が他の自然物と共有する特徴のひとつにほかならない。人間の身体が物質を構成要素とする有機体であることによつて、人間と自然とのあいだを物質が移動することが可能となる。ここで物質代謝と呼ばれるのは、さしあたりはこの物質の動き、あるいは流れである。このような物質代謝の用法は、しかし、こんにち人口に膾炙している用法とは異なる。この差異

を確認することから、物質代謝概念のマルクスの意味へと接近してゆくことにしよう。

よく知られているように、物質代謝という語は英語ではメタボリズム (metabolism) という語にあたる。メタボリズムという語はこんにち新陳代謝と訳され人口に膾炙しているが、それはおもにつきのような生物学的な意味を担うものである。それによれば、物質代謝とは「生体内で行われる物質の変転」³⁾である。生体が外部から食物として体内に摂取した物質を消化し吸収し排泄する過程で、体内ではさまざまな化学変化が進行している。体内に摂取した物質をもとにして、その生体に固有の、あるいは必要な物質を産出する同化や、複雑な物質を単純な物質へと分解し、それによってエネルギーを取り出す異化といったような化学変化である。生物学では、物質代謝という語はこのような生体内での化学反応をおもに意味する。

マルクスの用法からすると、こんにちの生物学的・生理学的な用法は相当に狭い。マルクスの用法に近づくためには、物質代謝の原語である Stoffwechsel という語のニュアンスを理解しておく必要がある。この語は、もともと Stoff と Wechsel とごうふたつの語からなりたっている。前者は素材、物質、質料などを意味し、後者は交換や交換を意味する。だから、Stoffwechsel は物質が場所や持ち手をかえて移動することをイメージさせるが、マルクスの用法を理解するには、そうしたドイツ語のニュアンスをつよく意識する必要がある。⁴⁾もちろん、物質代謝概念にはこんにちの生理学的な意味を含むことができるわけだけでも、マルクスの用法はもつと広い。生体内での化学変化だけでなく、自然から獲得した食物を体内に摂取すること、人間の排泄物が自然へと戻されること、あるいは人間の手による生産物が社会の内部を駆けめぐることまた物質代謝なのである。このことをマルクスのテキストにそくして確認してみよう。

ここではおもに『資本論』のテキストをとりあげるけれども、そのなかでマルクスは物質代謝概念を体系的に叙述してはいないし、その定義を明示的におこなっているわけでもない。しかし、いくつかの断片な記述を集めてゆくと、物質代謝概念の輪郭がその広がりにおいて浮かびあがってくる。事実、マルクスのテキストを読むと、物質

代謝という概念には三つの用法があることがわかる。それぞれ生態学的意味、社会的意味、化学的意味と呼ぶことができる。まず生態学的意味での物質代謝の用法から検討しよう。

労働は第一に人間と自然の間に介在する一過程、人間が自分自身の行為を通じて自然との物質代謝を仲介し、調節し、制御する一過程である。人間は自然素材に対して自分もまた一つの自然力として向き合う。人間は自分の生活に利用できる形で自然素材をとりこむために、腕、脚、頭、手など自分の肉体に備わっている自然力を活動させる。この運動を通じて人間は自分の外なる自然に働きかけ、それを変化させるが、同時にそれによって自身の本性も変化させる。⁵⁾

人間は労働をつうじて自然に働きかけ、それを変形し、その一部をみずからのうちに摂取する。この過程で物質が移動し変化する。それが物質代謝である。食物を食すばあいのように、労働の果実がただちに身体に取り込まれることもある。しかし、労働の生産物がべつの労働のために用いられたり保存されたりするように、労働の生産物はただちに直接に消費されとはかぎらない。しかし、そのような事態もまた、人間と自然のあいだに生起する物質の移動と変化の一環なのである。人間が生存するためには、このような「人間と自然とのあいだでの素材のやりとり」⁶⁾である物質代謝が不可欠であって、そのかぎり物質代謝を媒介し実現する労働は「水遠の自然必然性」⁷⁾である。そのようにマルクスはいう。ここで記述されている物質代謝を生態学的意味での物質代謝と呼ぶことにしよう。⁸⁾

生態学的意味での物質代謝については、ほぼこの引用で尽きるのであるが、すこしだけ敷衍しておく。まず、引用文は『資本論』の労働過程論という文脈で書かれているから、ここでは労働に焦点が定められている。しかし、物質代謝が自然と人間のあいだの物質のやりとりである以上、生活や産業によって生み出される廃棄物の排出や、

身体の排泄行為などもまた物質代謝概念に含まれるはずである。たとえば、『資本論』第三巻においては、消費上の廃物として「人間の自然的物質代謝から出てくる廃物」について触れられており、それは文字どおり「人間の自然的排泄物」のことである。⁹⁾

また、人間と自然のあいだの物質代謝は、孤立した個人の営みによつてのみ行なわれるのではないことにも注意しなければならない。人間の物質代謝は、しばしば社会的な回路を迂回する。たとえば、収穫された果実は市場で交換されなければ、それを食する者の手に届かないだろう。だから、それを市場に運ぶことが必要であり、それを可能にする産業もまた必要となる。それだから、自然と人間とのあいだに生起する物質代謝、つまり生態学的物質代謝にはふたつの水準があると考えるべきであろう。ヘイワードのことは借りるなら、「このエネルギーと物質の交換には個人レベルのものと社会レベルのものがある」¹⁰⁾。つまり、個人がみずからの身体を維持するためにおこなう呼吸、摂取と排泄、労働といった営みと、農業や工業といった社会的なレベルでの営みとである。生態学的物質代謝は、たんに個人的身体と自然との直接的関係という水準では完結しえないのであって、それだから自然と社会とのあいだで生起するより複雑な物質代謝の水準へと視線を延ばしてゆく必要がうまれる。

この社会的な水準での物質代謝を射程におさめることができる物質代謝の用法が、『資本論』のテキストに存在している。商品交換という特殊な文脈においてであるが、文字どおり「社会的物質代謝」という語をマルクスは用いている。

交換過程は商品を、それが非使用価値である持ち手から、それが使用価値である持ち手へと移転させる。そのかぎりでは、交換過程はひとつの社会的物質代謝である。¹¹⁾

商品の素材的内容から見れば、運動W—Wは、商品と商品の交換であり、その結果のなかに過程が消失する社会

的労働の物質代謝である。⁽¹²⁾

労働生産物の物質代謝がおこなわれる形態転換 $W \rightarrow G \rightarrow W$ 。⁽¹³⁾

資本制社会にあつては、生産物の支配的な交換様式は商品交換である。商品交換は通常は物々交換ではなく貨幣を媒介として成立するから、交換の当事者たちは商品 (Ware) を売り、貨幣 (Geld) を手に入れ、この貨幣もちいてさらに別の商品を手に入れる。それだから商品交換の過程は $W \rightarrow G \rightarrow W$ と標記される。このように商品が持ち手をかえて移動してゆくことが、さしあたりマルクスによって物質代謝と呼ばれている。ちなみに、『資本論』に先立つ『経済学批判要綱』や『経済学批判』では、物質代謝という語はもっぱらこの意味で用いられているようである。

マルクスは社会的物質代謝概念を商品に限定して用いているけれども、マルクスの用法と齟齬をきたさないかたちで、もうすこしその意味を拡大することが許されるだろう。というよりも、生命の社会的生産という問題設定に適合的なものとするためには、社会的物質代謝概念を資本制下での商品交換という狭義の用法に限定してしまうのではなく、狭義の用法と整合するいつそう包括的な用法を練りあげることが必要となるだろう。そして、社会的物質代謝という概念は、そうした意味の拡張にふさわしい概念であるように思われる。たとえば、商品の交換は、商品の生産のために費やされた資源やエネルギーを交換することでもある。また、商品交換というかたちをとらなくとも、生産物が交換されるなら、そのとき資源やエネルギーの交換がおこなわれている。そのような資源やエネルギーの社会内での循環を留意させて、社会的物質代謝という語を用いることも可能であろう。

『資本論』における物質代謝概念は、主として以上のようなふたつの意味で用いられているのだけでも、第三の、見過ごすことのできない用法が存在している。化学的な意味での物質代謝である。「…〔略〕…機械は自然の

物質代謝の破壊力にさらされる。鉄はさび、木は朽ちる⁽¹⁴⁾。たしかに、マルクスが『資本論』に書き残しているのは、化学変化が形あるものに否定的に作用するような局面だけである。だけれども、化学的な変化をそのような否定的側面に限定する必要はないだろう。たとえば、人間が食料として手に入れるものは、それ自体すでに化学的変化の産物である。化学変化は破壊的に作用するだけでなく、構築的にもまた作用する。そもそも、分子のレベルでの物質の転換は生命現象の基礎である。化学的意味での物質代謝をこのように拡張することが許されるとすれば、化学的物質代謝は、それがなければ人間の生命が不可能になるという点できわめて基底的なのであり、そのかぎり、この化学的用法の存在はもつと強調されてよい。

マルクスの三つの用法を以上のように敷衍することが正しいとすれば、マルクスの意味での物質代謝はつぎのような複合的な過程として説明することができるだろう。生態学的意味での物質代謝をつうじて、人間は自然とのあいだに物質の流れをつくりだす。つまり、みずからの生存に必要な物質を手にいれ、不要になった物質を吐きだす。この物質の流れは、まずは直接に身体的水準で確認することができる。ひとりひとりの人間は、飲食、呼吸、排泄といった身体とじかに直結する水準で物質代謝をおこなっている。また、人間は労働という層でも物質代謝を行なっている。労働は、自然物を人間の生活、生命に馴染むように変形してゆく。しかし、自然との物質代謝は、人間の孤立した行為によっては達成されないのが常態であろう。むしろ、それは複雑に入り組んだ社会的関係のなかに織り込まれることによって実現される。自然から社会に取り込まれた物質は、社会的物質代謝によって社会のなかを移動する。この社会的物質代謝は、生命の持続にとって不可欠である。たとえば、都市の生活者たちはみずからの食糧を直接に生産することは困難であって、商品の交換という社会的関係をつうじて食糧を手にいれるほかに有効な選択肢はないだろう。そして、生態学的物質代謝であれ社会的物質代謝であれ、それぞれの段階で化学的な物質代謝がつねにすでに貫徹している。人間の生命は、このような生態学的・社会的・化学的な物質代謝によって貫かれ再生産されている。

2 資本制と物質代謝

身体と社会を貫く物質の流れのなかで人間の生命が生みだされ維持されること。あるいはおなじことだが、この物質の流れが人間の生命の可能性の条件であるということ。このこと自体は、とりたてて記すべき事柄ではないのかもしれない。なぜなら、このことは生物学的な知見と親和的であり、そのかぎりマルクスに固有の発想とはいえないかもしれないからである。たとえば、福岡伸一は『生物と無生物のあいだ』⁽¹⁵⁾という美しい本のなかで、生命の本質を「動的平衡」という概念を用いて説明している。原子の水準で見ると、人間の身体はたえまない物質の流れのなかにあるが、にもかかわらずこの流れのなかで、あるいはこの流れによって一定の秩序を維持している。これが動的平衡である。生命とはこの動的平衡そのものであるというのが、福岡の見立てである。物質代謝を、たとえば動的平衡といった生物学的な概念と関連づけて理解してゆくこともできるように思われる。

物質代謝という概念はそうした生物学的地平への傾きをはらんでいるけれども、ここでは、マルクスというテクスト上の文脈において、この概念がもつ可能性を確認することが目指される。その可能性とは資本制にたいする批判のことである。この資本制批判は、物質代謝の攪乱という視点から遂行される。さらには、それにとどまらず、物質代謝という概念をつうじて、資本制のありかた、あるいは人間と経済との関係のありかたといった問題について、ある種の常識を問いなおすことが可能にもなる。後者については次節よりのちに取り組むことにして、まずはマルクスの文脈において、物質代謝概念がどのような視点から資本制批判に結びつくのかということを確認することにしよう。そのためには、農業化学者リービヒの思想に触れておく必要がある⁽¹⁶⁾。

マルクスは物質代謝の思想をリービヒのテクストから学んだとされている⁽¹⁶⁾。リービヒは一八〇三年に生まれ一八七三年に没しているから、一八一八年に生まれ八三年に没しているマルクスよりもやや年長であるが、同時代人で

あるといつてよいだろう。リービヒの名著は『有機化学の農業及び生理学への応用』⁽¹⁷⁾である。書名からも明らかであるように、リービヒは化学の農業への応用を企てたことで知られる。マルクスは『資本論』のなかでリービヒに触れて、つぎのように述べている。「自然科学の視点から、近代農業がもつ負の側面を論じたことはリービヒが残した不滅の功績の一つである」⁽¹⁸⁾。リービヒは、近代農業が抱えている問題点に警鐘を鳴らした人物として、マルクスによって積極的に評価されているわけである。いうまでもなく、リービヒが近代農業の負の側面を批判することができたのは、彼がまさしく物質代謝の思想をもっていたからにほかならない。椎名重明はリービヒの思想を次のようにまとめている。

…〔略〕…土壤および大気から植物に吸収・同化された栄養素は、さらに動物（および人間）に吸収され、そして植物・動物（および動物の排泄物）の腐敗・分解の過程をへて再び大地（および大気）にかえるというのがそれである。⁽¹⁹⁾

生物の栄養素をなす物質は、食物連鎖をつうじて土や大気から植物を経て動物へと至り、ふたたび土や大気に帰ってゆく。自然、植物、動物、人間を含めて、栄養素としての物質がそれらのあいだで循環してゆくという自然の物質循環が、リービヒの思想の中心にある。しかし、このような物質循環の思想は、なぜ近代農業の負の側面を明らかにしうるのだろうか。このことを理解するためにも、ヨーロッパの農業がおかれた当時の状況に一瞥を与えておく。

リービヒが農業に化学を応用しようと企てたことについては、すでに触れた。このリービヒの企ては、第二次農業革命⁽²⁰⁾の動きと連動している。第二次農業革命は一八三〇年代から八〇年代にかけておこったもので、このあいだに土壤科学と肥料産業とが発展したことによって特徴づけられる。第二次農業革命が促された背景としては、お

きくふたつのが挙げられる。ひとつは、ヨーロッパの近代農業が陥っていた土地の消耗という状況である。ヨーロッパの土地の消耗は深刻であった。海鳥の糞などが堆積し石化して出来あがったグアノが、土地の肥料とするために南米からイギリスへと運び込まれていた。あるいは、ヨーロッパでは肥料として骨粉が用いられていたが、その不足分をまかなうため、人骨をもとめて墓が掘りかえられたとさえいわれている⁽²¹⁾。

くわえて、資本制的な農業の成立という背景がある。つまり、農業もまた資本制に包摂されることから免れえなかつたということである。農業が資本制のもとに包摂されるということは、利潤の拡大という資本制的生産の原則が農業においても買かれるということである。したがって、よりおおくの収穫量を確保すること、つまり土地の生産力をあげることが農業の課題となる。このことが肥沃な土壌への欲望を駆り立て、この欲望が土壌改良や肥料生産への圧力を高めることにつながり、第二次農業革命を後押しすることになったわけである。このような社会的文脈のなかで、リービヒの名著がものされることになる。くりかえせば、それは文字どおり化学を農業へと応用する試みであつて、そこで強調されたのは、窒素、リン、カリウムといった土壌にふくまれる栄養素が植物の成長にとって重要な役割をはたすということであつた。

それでは、当時のヨーロッパがおちいった土地の消耗という事態は、リービヒの物質循環の考えによつてどのよう説明されるのだろうか。結論を簡単にいえば、土地の消耗は物質代謝が断たれてしまうことによつて生じたのである。食料というかたちで栄養素が農村から都市へと届けられる。この栄養素は都市に住まう者たちの身体に摂取され、そして排泄される。この都市の排泄物は、ほんらい農地へと回帰するはずのものである。しかし、都市と農村が分離し、都市の排泄物が農村へと回帰しないために、この物質代謝が途絶えてしまう。それゆえに、土地は瘦せ消耗してしまつたのである。その一例としてリービヒが挙げているのは、排泄物に含まれる生命に必須の物質、たとえばリンやカリウムが、当時のイギリスではテムズ川へと垂れ流しされてしまつたという事実である。

いまひとつ明白なのは、仮に一八一〇年以来輸入されたリン酸塩と一八四五年以来輸入されたグアノの成分が、全く損失せずにイギリスの畑の循環内にとどまっていたならば、一八六一年にこれらの畑は、それだけで一億三〇〇〇万の人間の食糧を生み出す基本的条件を備えていたであろう、ということである。：〔略〕：イギリスが毎年輸入する莫大な量の肥料は再び海へと流れ去り、肥料の生み出す生産物は人口の増加分を養うに至らないのである。⁽²²⁾

循環する物質の流れが絶えてしまっている以上、肥料をもとめてグアノを輸入し農地を改良しても、それは土地を一時的に肥沃化するにすぎず、持続可能な肥沃化に繋がることはない。こうして物質の流れは循環的なものではなく、むしろという認識の枠組みが生み出されることによって、こんどはその循環の攪乱が認識可能なものとなるのである。ちなみに、『資本論』にもほとんど同種の発想がある。マルクスによれば、人間の排泄物が農業にとって重要であるにもかかわらず、資本制はロンドンの膨大な糞尿を浪費することしかできない。

消費上の廃物は、農業にとつてもっとも重要である。その使用にかんしては、資本主義経済にあつては、莫大な浪費が行なわれる。たとえば、ロンドンでは四五〇万人の糞尿の処理について、資本主義経済は、巨費をもってこれをテムズ河の汚毒化のために用いる以上の良策を知らないのである。²³⁾

すでに明らかのように、リービヒのテクストにもマルクスのテクストにも共通に見出しうる論点は、物質的な流れの綻びがただ自然的なものとしてとらえられてはいないということである。つまり、この綻びの背後に社会的な要因が探しとめられうるのである。物質代謝の攪乱がなんらかの社会的回路によって生み出されること、あるいはなんらかの社会的機制によって物質代謝が綻んでしまうこと——そのような発想がマルクスに流れ込んでくるわ

けであるが、その源泉のひとつがリービヒであったことは、おおくの論者が指摘するように確かなことだろう。いうまでもなく、マルクスのばあい、物質代謝の攪乱の社会的要因は資本制と切り離すことができない。たとえば、物質代謝の攪乱を引き起こす都市への人口集中は、労働者が都市へと流れ込んだことの結果である。みずからの労働力を売るほかない労働者を資本制はその原動力として大量に必要とするのであって、そのかぎり都市への人口の流入は資本制のもとでは不可避である。マルクスはつぎのように述べている。

都市住民が大きな中心地に集まり、都市人口がたえず過密の度合いを増すにつれ、資本制的生産は一方で社会の歴史的動力を蓄積していく。しかしそれは他方では、人間と大地のあいだの物質代謝、すなわち食料や衣料の形で人間に利用される土壤成分の土壤へのフィードバックを、つまりは肥沃な土壤が持続されるための永遠の自然条件をかき乱す。⁽²⁴⁾

しかし、資本制は生態学的な物質代謝を攪乱するだけではない。たしかに、資本制が生態学的な物質代謝にたいして攪乱的に作用することは事実だとしても、他方で、資本制は、資本制的に編成された社会的物質代謝をつうじて、生態学的な物質代謝を埋め合わせることさえするのである。たとえば、生態学的物質代謝が直接的なかたちで遂行される農業を例にとってみよう。『経済学批判要綱』のなかには、つぎのような考察がみられる。

ひよつとして農業が糞化石を調達するのに絹織物の輸出によるほかはないということがあるかもしれない。その場合には、絹マニユファクチュアはもはや奢侈産業ではなく、農業にとっての必要な産業として現われることになる。…〔略〕…すなわち、農業が自分自身の生産の諸条件を、もはや自分自身のなかに自然生的なものとして見いださないと、この諸条件が自立的な産業として農業のそとに存在するということ——また、この諸

条件が農業のそとに存立することによって、この他種の産業が組み込まれている錯綜した関連の全体もまた、農業の生産諸条件の範囲内に引き入れられていること——⁽²⁵⁾

土地の消耗を解消するために糞化石、つまりグアノを肥料として用いることは、攪乱した生態学的物質代謝を補うことである。しかし、このグアノを手に入れるためには、異国との商品交換をおこなう必要がある。つまり、グローバルな社会的物質代謝が、ローカルな生態学的物質代謝のほころびを埋め合わせるのである。グアノと交換するための商品が農業以外の産業によって生産されるかぎり、農業は他の産業によって、そしてその産業をとりかこむ社会的関係のネットワークによって、したがって社会的物質代謝によって可能になる。この社会的関係のネットワークが資本制によって象られているかぎり、生態学的物質代謝は資本制によって埋め合わされることになる。もつとつよくいえば、生態学的物質代謝は資本制によって可能になり実現されている。このことは、たとえば野菜を生産するために大量の化石燃料を、あるいはさまざまな肉類を生産するために大量の飼料を輸入するこの国の、まさに物質代謝のかたちである。

物質の流れは、ときに資本制によって歪められ滞りもするが、ときにこの滞りが資本制それ自体の編成原理によって解消される。だから、人間の物質代謝を思考するためには、たんに生態学的物質代謝に注目するだけでは不十分である。すでにみたように、生態学的物質代謝が、ときに社会的物質代謝によって妨げられ、ときにそれによって支えられているのである以上、物質の流れとしての物質代謝は、そうした社会的編成原理と無関係に理解されてはならない。マルクスの用法からはなれて、生態学的物質代謝をエコロジと呼びかえ、また社会的物質代謝をエコノミーと呼びかえたとすれば、エコロジとエコノミーとは両者の絡み合いのなかでとらえられなければならないことになる。このような問題設定からマルクスの物質代謝の思考を読み直してみることが、かならずしも無理なことではないように思われる。以下ではそのことが試みられる。

3 エコノミーをエコロジーから見る

マルクスの物質代謝の思考はエコロジーとエコノミーの絡み合いを示唆するが、この思考はその射程をどこまでおぼしているのだろうか。その射程を測るために、ここでは「エコノミーとエコロジーのあいだ」という言葉もちいて、物質代謝という問題設定を敷衍してみたい。ひろく知られているように、エコノミーという語もエコロジーという語も、ともにギリシア語のオイコス(家)を語源としている。このような語の類縁性にもかかわらず、エコノミーとエコロジーとは、こんにちでは別の論理によって支配された秩序として対立的に理解されている。これにたいして、物質代謝にかんするマルクスの思考は、すでに見たところによれば、エコノミーとエコロジーとが交錯する点から紡がれている。それでは、エコノミーとエコロジーのあいだに立つことで、つまり両者の交錯点から見ることで、どのような認識の地平がひらけるのだろうか。図式的に表現するならば、まずエコノミーをエコロジーから見るのが可能になり、またエコロジーをエコノミーから見るのが可能になる。この節では、エコノミーをエコロジーから見るとき、物質代謝のどのような側面が可視的になるのかということについて考える。

エコノミー、つまり経済という語によって、通常は市場における人間のさまざまな活動がイメージされるだろう。あるいは市場経済という物言いがなされ、市場と経済とがはじめから等置されてしまっている。だけれども、経済という語が包摂する領域や活動は、市場のそれよりも相当にひろい。たとえば、文化人類学なら婚姻に伴う女性の移動をも経済に含めるであろうが、このように、経済という概念はがらう意味の厚みと広がりをもっている。ほんたいに、こんにちの経済という語はかなり意味が限定されていることになる。そして、このように経済の、つまりエコノミーの意味が狭隘化することによって、市場に代表される狭義のエコノミーが作動するために、それが不可欠であるのかという認識がゆがめられてしまう可能性がある。いうまでもなく、この歪みによって隠され

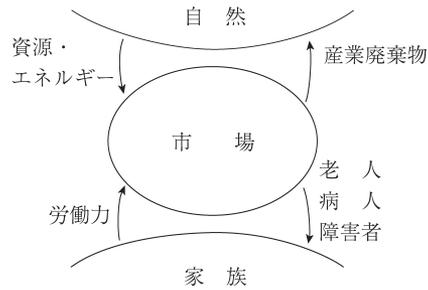


図 1

この意味で、つまりエコノミーについての思考習慣を自明視するのではなく、むしろその相対化を企てようとする点から企てられる経済学批判は、どのようなものでありうるだろうか。そのひとつのモデルを提供するのが玉野井芳郎である。玉野井はカール・ポランニーやイヴァン・イリイチの紹介に尽力したが、たとえば『エコノミーとエコロジー』⁽²⁷⁾に代表される経済学批判の仕事をもまた展開した。その玉野井の主張のエッセンスは図2で与えられる。この図は、図1に示されたエコノミー-自然関係の精緻化の度合いを深めたものだと考えることができる。

太陽から発するエネルギーが絶対的な出発点である。バタイユ風にいえば、自然の純粹な無償の贈与がすべての出発点である。そして、その太陽のエネルギーから栄養を生み出す植物、それを食む動物、さらにそれを食する人

てしまうのが物質代謝なのである。この消息を確認しておこう。

図1は、上野千鶴子から借用したものである。⁽²⁶⁾ 市場においては、さまざまな物が作りだされ、売買され、消費されるわけであるが、その商品の来し方と行く末は、ブラックボックスとされてきた。商品の来し方と行く末はいくまでもなく自然との物質代謝のうちにあるのだけれども、それは市場の外部として表象されてしまう。それだから、エコノミー市場という枠組みのもとでは、自然との物質代謝がエコノミーの成立にとって本質的なものとは見なされないことになる。しかし、自然という外部がなければ、そもそも生産も消費も不可能である。エコノミーは市場をこえて、自然との物質代謝をもその要素として含まなければ、存立することができないのである。このようにして、市場の外部としての自然との関係もまたエコノミーと呼ぶうるのだとすれば、物質代謝と

〔このモデルは〕市場システムにおいては背後にかくれていた物質・エネルギーの流れを表面に登場させることによって、人間社会の経済活動を、エネルギー変換・物質の投入と加工・最終消費・廃棄物処理という諸過程の連続する循環システムとしてとらえ直そうとする。⁽²⁸⁾

市場という空間においては、物質代謝のうちでも商品交換によって代表される社会的物質代謝が前景化する。それだから、市場においては、社会的物質代謝の作動を可能にしている生態学的物質代謝の存在が隠され、見えにくくなる。玉野井による経済学批判が目指していたのは、この隠された物質とエネルギーの循環を明るみに出し、それによって構築されている「市場経済の枠を乗り越えた広義の経済」⁽²⁹⁾を見出すことであつたわけである。

このような経済学批判の過程において、玉野井はシュレーディングアの仮説に触発されて、物質代謝概念とエントロピー概念とを結びつけようとした。シュレーディングアによれば、生物は外界との物質代謝をつうじて、物質やエネルギーの移動を実現するだけではなく、物質代謝においてエントロピーを吐きだし、エントロピー増大の法則に抗うことで生命を維持する。「…〔略〕…物質代謝の本質は、生物体が生きているときにはどうしてもつくり出さざるをえないエントロピーを全部、うまい具合に外へ棄てるということにあります」⁽³⁰⁾。人間の物質代謝を理解するための基軸に、そのようなタイプの生命論を、つまりエントロピーの廃棄にもとづく生命論をおくことが、玉野井によって提唱されることになる。

「物質代謝」はドイツ語で Stoffwechsel という。それは質料の交換であり、外的環境との間で質料をやりとりすることだと考えられていたけれども、それは正確でない。Input よりもむしろ、ネガの Output (高エントロピー) をいかに処理するかが「物質代謝」の本質であるということが、こうして新たに理解されるのである。⁽³¹⁾

玉野井のエコノミーIIエコロジーの思想の特徴は、このようにして物質代謝とエネルギー変換の流れにエントロピー概念を絡ませたことにある。ただし、シュレーディングガーが導入した概念である「負のエントロピー」をはじめ、エントロピー理論を経済学批判へと結合する試みをどのように評価すべきであるかという問題に答えることは、筆者の能力をこえている。しかし、そうした問題への回答を留保したとしてもなお、玉野井の論考から汲みとり引きうるに値するような論点が存在するのは間違いない。つまり、それは、物質代謝を考えるうえで見逃しえないネガティブな側面、いかえれば自然との物質代謝の不可避の契機である排泄や廃棄という論点である。物質代謝という事態は、人間と自然とのあいだで生じるたんなる物質の双方向的な移動として理解されるだけではなく、むしろ物質の移動にもなうある種の破壊としても理解されなければならない。

物質代謝という事態においてアウトプットが破壊的な効果をもつことは、さまざまな環境問題を経験してきた現代においては、たやすく理解できることだろう。たとえば、核廃棄物やさまざまな化学物質が大气や水や土壌にまきちらかされるとき、微生物をはじめとした生命が傷つけられ、物質代謝が攪乱される。と同時に、インプットの場面においてもある種の破壊性が作用している。玉野井は、「物を「つくる」ということの裏には何かの秩序が「こわれる」ということがある³²⁾」という言い方をしている。生産というのは、なにかを作り出すことだと考えられているから、それが破壊的側面をもつことが見落とされやすい。だけれども、たとえば原料や材料を自然からとりますこと、材料を加工することなど生産の過程のそれぞれの段階で、対象への破壊がおこなわれている。だから、なにかを作るという側面から生産をとらえることは一面的であることが明らかになる。さらにいえば、人間がみずからの身体を作り出すためになにかを食べ消化するということは、みずからとは異なる他者の生命を破壊し分解し、みずからに同化する営みである。それは、他者を抹消する一個の「暴力」である。

このように考えてゆくと、物質代謝には不可逆性という性質ともなうことが理解される。生卵から茹卵を作ることはできるが、ひとたび生卵が茹卵になってしまうと、けっして生卵に戻ることはない。このような不可逆性が

物質代謝には含まれている。そのようなものであるかぎり、物質代謝はたんなる物質の循環ではない。それは取り返し不可能な変化を自然のうちに生み出すものでもある。人間の衣食住という基礎的な営みでさえ、ときに、そうした不可逆な変化を自然へと刻みこむ営みなのである。このようにして、玉野井というレンズをとおして物質代謝概念をみるとき、物質代謝概念がもつ否定的な含意が導きだされよう。

物質代謝概念を更新した玉野井の視点からは、マルクスの姿は両義的なものとなる。いっぽうで、マルクスの物質代謝論はいなみがたく先駆的である。「だが今日から考えてここでとくに注目に値するのは、このような人間の自己生産が実は人間と自然との物質代謝を基礎として行なわれるものだということを、このときすでにマルクスが洞察していたことである」⁽³³⁾。そのように玉野井はいう。しかし、たほう、それはあくまでも端緒にすぎない。マルクスの物質代謝の洞察は、その後じゅうぶんに展開されなかったというのが、玉野井の見立てである。いくつかの論点があるが、ここでは二点に触れておく。

ひとつは、土地をどのように理解するのかという問題である。『資本論』において、マルクスはつぎのように述べている。「大地は労働者にとって本源的な食糧倉庫であり、同時にまた労働手段の本源的な武器庫である」⁽³⁴⁾。このような倉庫、武器庫としての土地理解は、玉野井にとっては一面的であった。むしろ大地は「生命の世界Ⅱ生態系の世界」⁽³⁵⁾であって、マルクスは食物連鎖やエネルギーⅡ物質循環が成立している環境として土地を捉えることができなかった。玉野井はそうした趣旨の批判をおこなっている。もうひとつは、マルクスの労働理解にかかわる。たとえば、マルクスの労働過程論は工業労働をモデルにしており、そのモデルからは農業労働のような生命を育む労働が排除されてしまう可能性がある。それゆえに、マルクスの労働の規定は、「非工業生産における自然の生命系の律動を根底のひとつにおいた規定」⁽³⁶⁾ではないことになる。

玉野井がマルクスにむけた個別の批判に答えることは、ここでは断念するほかない。⁽³⁷⁾とはいえ、本稿の立場からはつぎのように応答したい。こんにちのエコロジーにかんする知識を根拠として、マルクスがエコロジー的に不徹

底であるというような批判のしかたも、たほうで、そうした批判に対抗するためにマルクスのうちにエコロジカルな要素をなけば強引に見出そうとするやりかたも、ともに本稿ではとらない。マルクスがエコロジイのこんにちの水準から見て劣っているという批判は当然すぎるからである。むしろ、生命の生産という問題を考えるために、マルクスの独特の貢献として読みなおしうるものがあるのかどうかという視点から、マルクスの物質代謝概念を解釈してみるべきである。

4 エコロジイをエコノミーから見る

物質代謝は自然と社会とを越境して移動し、自然と社会とによってつつまれる身体を貫く。リービヒからマルクスが学んだこの物質代謝という視座を採用するとき、いったいどのような思考をさらに紡ぎうるのか。このことを考えるのが本稿の後半の課題であった。第3節では、エコノミーをエコロジイから見るとい見出しのもとで、エコノミーがエコロジカルな大連関の一部を占めているということ、エコノミーがエコロジカルな連関の攪乱要因となりうることを玉野井モデルにそくして見てきた。物質代謝の思考は、いっほうで、このようにいわばマルクスを緑化する方向へと伸びてゆくことができる。さらには、その思考の現代的な到達点から振り返って、マルクスの思考が緑の思考として不十分であることを批判することもできる。玉野井がそうしたように。

たほうで、しかし、この本稿のもうひとつの課題である「エコロジイをエコノミーから見る」という視線は、物質代謝の思考をなおもべつな方向に導いてゆくものであるように思われる。くりかえすなら、通常の認識では、エコロジカルな連関、つまりエコシステムは自然の秩序であるのにたいして、エコノミーは社会の秩序であると想定される。つまり、両者はまずは二元的に表象され、しかるのちにエコノミーがエコシステムを破壊するというようなかたちで、両者の関係が説明されることだろう。しかし、物質代謝の思考を採用すると、エコシステムはエコノ

ミーの秩序と不離不可分であることを強調することができる。もっと強くいえば、人間のばあい、エコシステムはエコノミーがなければ実現しえない。前者は後者によってその根底から規定されてしまっているのである。さきに、生態学的物質代謝は社会的物質代謝によって媒介されなければ維持されないという点を指摘しておいたが、ここで試みるのは、そのことにべつの表現のかたちを与えることである。

すこし抽象的であるから敷衍してみよう。生命の生産と再生産の営みは、つまり労働、食事、生殖などの営みは、つうじようは自然的な営みとして、いわばエコロジカルな営みとして考えられるだろう。だけれども、人間にあっては、この営みはそれ自体が社会的な営み、つまりエコノミーの営みである。あるいは、エコノミーの営みとしてでなければ、またはエコノミーの営みによって媒介されなければ、これらの営みはひどく困難になる。それほどまでに、エコノミーがエコロジカルな営みにふかく関与し、それを可能にしている。もっとつよくいえば、エコノミーは人間の自然との関係を、つまりエコシステムを規制しており、そのことによって、エコノミーそれ自体が人間の自然にたいするエコロジカルな構えを象るのである。

おもえば、このような理解は、すでに廣松渉によっていちはやく差しだされていたのであった。このような理解が廣松によって強調されるのは、マルクスの歴史観の基本構図とエコロジの定義との類似性を指摘する文脈においてである。ひろく知られているとおり、エコロジという語はドイツの動物学者ヘッケルによって作られた。その日付はすくなくとも一八六六年にまで遡るから、『資本論』第一巻の刊行に一年ほど先立つことになる。ヘッケルによるエコロジの定義は『有機体の一般形態学』において行なわれた。ここでは、つぎのように記されている。

エコロジという語によって、それは有機体を取り囲む外界にたいする有機体の関係についての学問全体のことであると、私たちは理解するのであって、この外界には、より広い意味において「すべての生存条件」を数え入

れることができる。生存条件は、一部は有機的自然からなり、一部は無機的自然からなる。⁽³⁸⁾

エコロジーという語は、こんにちの日本語にあつては生態学と訳される。生態学は生物とその環境との相互関係、したがってエコシステム、つまり生態系の構造と機能を探究する学問のことである。その基本的な枠組みが、このヘッケルによる定義のうちですでに書きこまれているのがわかる。ところで、廣松によると、このようなエコロジー的な認識はすでに『ドイツ・イデオロギー』において先取りされているのである。この認識は、歴史の可能性の条件にかんする叙述のうちに含まれている。大切な場所であるからで、すこし長くならなければならない。

人間史全般の第一の前提は、いうまでもなく、生きた人間諸個人の生存である。これらの諸個人が自らを動物から区別することになる第一の歴史的行為は、彼らが思考することではなく、彼らが自らの生活手段を生産し始めるということである。第一に確定さるべき構成要件は、それゆえ、これら諸個人の身体組織と、それによって与えられる身体以外の自然に対する関係である。われわれは、ここではもちろん、人間そのものの肉体的特質についても、また人間が眼前に見出す自然的諸条件、すなわち地質学的、山水誌的、風土的その他の諸関係についても、立ち入ることはできない。歴史記述はすべて、この自然的基礎ならびにそれが歴史の行程の中で人間の営為によってこうむる変容から、出発しなければならない。⁽³⁹⁾

ここでマルクスとエンゲルスは、人間の歴史を可能にする条件として、人間の生存ということ挙げている。いうまでもなく、生存するために、人間は自然に働きかけ、自然を変容させなければならない。歴史の基礎にはこのような対自然的関係が存在している。それだから、人間がみずからの生存を維持するために働きかける自然との関係が、つまり地質学的、山水史的、風土的關係が、歴史記述の基礎となるのである。しかし、そうした関係を問う

ことは、人間の有機体とその外界との関係を、つまり人間のエコシステムを問うことである。だから、『ドイツ・イデオロギー』では、歴史叙述の基礎にエコロジー的な認識が含まれていることになる。この消息については、廣松による説明にゆだねる。

見られる通り、マルクス・エンゲルスは、唯物史観の視座を設定するに際して、まさしく、生態学的な了解から出発しているのである。右に掲げた一文は、まさにヘッケルの「生態学」の定義、つまり「動物の、有機的・無機的環境に対する関係の学」における「動物」を「人間」という種に特定したケース、すなわち、人間生態学流の構えを表明するものになっている⁽⁴⁰⁾。

モグラのエコシステム、あるいはニホンカモシカのエコシステムといった言い回しが成立するのとおなじように人間のエコシステムという言い回しが成立するとすれば、『ドイツ・イデオロギー』はまさしく人間のエコシステムを基本発想に据えているわけである。しかし、同時に、このようなエコロジカルな認識によって記述されるべきこの対自然的関係Ⅱエコシステムは、のちの『経済学批判』序言によって定式された土台／上部構造という作業仮説に当てはめるなら、社会の土台とおなじである。いうまでもなく、マルクスの文脈においては、社会の土台とは経済的な諸関係、つまりエコノミーなのである。したがって、エコノミーは、まさしく人間のエコシステムそれ自体であることになる。

このような解釈が正しいのであれば、生命の生産がつねに対自然的・社会的関係のなかで営まれるという『ドイツ・イデオロギー』のテーゼは、つぎのように読まれてはいけない。つまり、一方に対自然的関係における営みがあり、他方に社会的関係における営みがある、という読みかたである。そうではなく、自然への関係、自然への構えそれ自体が、つねにすでに社会的関係によって媒介され規制されているのである。つまり、人間の対自然的関係

は社会的関係に媒介され、社会的に編制されて成立する。だから、人間のエコノミーが人間の自然にたいする構え、開かれ、関わり、すなわちエコシステムを象り規制している。

もつと踏み込んで、つぎのように考えることはできないだろうか。人間のエコノミーを問うことは、人間のエコシステムを問うことと同義的になると。たとえば、野生のアホウドリが、なを食し、どのような巣を作り、どのように子孫を繁殖するのか、そしてそうした営みがどのような生存環境のもとでなされるのか——そうしたことを問うことは、アホウドリのエコシステムを問うことである。おなじように、人間がなを食し、どのような住居を構え云々という営みを、どのような生存環境のもとで遂行しているのか——そのことを問うことは、人間のエコシステムを問うことである。しかし、この営みは、つねに同時に人間のエコノミーとしても記述されうる。だから、人間のエコノミーを理解することは、人間がどのように対自然的関係を、したがってエコシステムを構築しているのかということを理解することに等しいものとなる。

そのようにいえるのなら、人間のエコノミーを考えることは人間と自然との関わりを考えることであるから、それはまた、自然的存在としての人間の、もつと直接的に言えば生物としての人間の特性を考えることでもあろう。つまり、人間以外の生物もまた自然と関わるけれども、とりわけエコノミーという関わりこそ生物としての人間に固有の関わりだからである。たとえば、大都市に住む人物が、水、食料、衣類といった、みずからの生存に不可欠のものを手に入れる場面を考えてみよう。そのひとつが個別に、直接に自然との物質代謝をおこなうことによってそれら必需品を手に入れることは、そのひとつが大都市に耕作地をもっているというような例外的な事例をのぞけば、ほとんど不可能であろう。そのひとつは、おもに商品を買うというしかたで生活必需品を手に入れるだろう。そして生活必需品は、こんにち、ほとんどが工業製品として生みだされている。それだから、ある人物の物質代謝は、農業はもちろん工業や商業といった産業を通じて作動する広大な物質代謝の内部においてか実現しえないことになる。あるいは、廃棄物や排泄物の処理にもまた、多様な産業が関わっている。現代の都市生活者は、そうした産

業に支えられなければ、排泄というひどく基礎的な生理的営みさえも儘ならないことになる。これらはたしかに一面ではエコノミカルな事態であつて、そのかぎり、それらがエコシステムにかかわる問題であると通常は考えない。しかし、それらは、こんにちの文明化された人間たちが生命を紡ぐためには避けがたいエコロジカルな事態なのである。そして、こうした産業を媒介しての自然との関わりは、他の動物とは異なる人間に固有の自然との関わりでもある。

それだから、種々の産業もまた、まさしく人間にとって生態系の分節をなしている。ふたたび廣松を援用しよう。

商工経済は、それぞれ相対的な自立性をもつ牧畜、農耕、鋤業という〈人間―自然〉生態系を基盤とし、それに立脚して加工的上架しつつ、かつ、これら基礎的な諸生態系を独得の仕方4)で媒介的に包括する特異な生態系である。

人間のエコシステムは、このようなさまざまな産業の、だからエコノミーの分節結合によつてなりたっているのであるが、このようなエコシステムは他の生物には見られない人間に固有の特徴である。

こうして、もしエコノミーが人間に固有のエコシステムであるのだとすれば、エコノミーの危機はエコシステムの危機であるという認識が可能となるだろう。このように記すと、大量生産・大量消費の経済システムが自然環境に負荷をかけることになるといったことがイメージされるかもしれない。もちろん、そうしたことも含みうるが、しかしここでは別のことが意味されている。つまり、エコノミーが危機に陥るとき、それはそのまま人間の生命の生産を可能にするエコシステムが危機に陥ることと同義だということなのである。たとえば、3・11の大地震直後の様子を思いだせばよい。商品の流通が滞り、米や水、パンや牛乳といった食品が店の棚からつぎつぎに消えてし

まった。それはたしかにエコノミーの危機である。しかし同時に、それは人間がそのなかで生命をつむぐ生存環境の、エコシステムの危機であった。そうしたエコノミーの危機は、自然災害においてのみ発生するのではない。さまざまな種類の経済恐慌 (Panic) は、物資の流通や購入を困難にし、ひとびとの生命の生産を揺るがすことにより、文字どおり人間の生存環境の危機 (Krisis) となる。

それだから、どのようなエコノミーが人間のエコシステムとして作動しているのかということ、人間にとって死活の問題であるはずである。いうまでもなく、現在の支配的なエコノミーのかたちは資本制にほかならない。人間は資本制というエコノミー||エコシステムにおいて、さまざまな水準でさまざまな形態の物質代謝を作動させている。生態学的物質代謝の水準で、つまりどのように自然に働きかけるかというような水準でも、すでに資本制が作動している。エネルギー資源の調達、農業、廃棄物の処理といったことが、ひとつの産業として営まれている。また、社会的物質代謝の水準においては、商品の流通というかたちで物質は循環している。対自然関係においても、社会においても、物質の移動においてイニシアチブを握っているのは、資本制という独特のエコノミー||エコシステムである。そこにおいては、物質代謝の流れは資本の論理——利潤の最大化——に委ねられることになる。物質代謝の流れが一種の均衡に達しうることかどうかもまた、資本の論理に委ねられる。

さらに、資本制は労働力をも商品化する。資本制下にあつては、多数の人間はその必要物を手にするために、みずからの労働力を売らなければならない。ある個人が生態学的物質代謝を実現するためには、そのひとはみずからの生命力である労働力をいったん売ることが必要とされるのである。そして、それをうまく売ることができないなら、そのひとの生態学的物質代謝は滞り攪乱されることになる。かくのごとく、人間の生命の営みは、そしてそれをつらぬく物質代謝は、エコシステムとしての資本制によって深い部分から規制されている。人間は資本制エコノミーをみずからのエコシステムとして引き受けて、生命を紡いでいる。それだから、生命と身体の再生産という主題を考えるためには、人間に固有のエコシステムとしての資本制エコノミーの意味が問われなければならないこと

になる。資本制は、人間のエコシステムとして、どこまでふさわしく必然的なのだろうか。おそらく、マルクスの『資本論』は、そうしたエコシステムとしての資本制という視点から、もういちど読み直すことが可能である。

おわりに

さて、これまでの物質代謝の思考から、どのような方向にマルクスの読解を導いてくことが可能なのだろうか。ふたたび『ドイツ・イデオロギー』から引く。

人間たちは彼らの生命を生産せざるをえないがゆえに、しかも一定の様式でそうせざるをえないがゆえに、歴史をもつ。そのことは彼らの意識と同様、彼らの肉体組織〔*physische Organisation*〕⁽⁴²⁾によって与えられる。

(28)

このテキストの末尾に記されている「肉体組織によって与えられる」という表現が、こんご筆者の考察を導いてゆくことになるはずである。この表現は、『ドイツ・イデオロギー』のなかに突然に書きこまれたが、しかしのちに本格的に展開されることはなかった思考の萌芽であるように思われる。この表現に触発されて、つぎのような思考を編んでゆくことも可能かもしれない。人間が身体であるかぎり、人間はみずからの身体に固有の仕方でありつまり他の動植物とは異なった固有のしかたで——自然と関係しなければならぬ。いうまでもなく、その対自然関係はエコシステムであると同時にエコノミーでもある。人間の身体のみならず、人間のエコノミーもエコシステムでありかたを深い部分で規定している。エコノミーもエコシステムが人間の身体構造によってつよく規定されていることを理解するためには、簡単な思考実験をすればよい。もし人間が、食べなくてもよい身体、眠らなくてもよい身体、衣服を纏わなくともよい身体をもっていたならば、エコノミーもエコシステムのかたちは、今日とはお

おきく異なっていたことだろう。そこまで考えなくとも、もし人間の身体サイズがもうすこし小さければ、いったいどうなっていたらうか。マルクスの思考はこの問いに届き触れているように思われる。この身体とエコノミー・エコシステムとの結びつきという問題が含意することがらを限界まで引き出すことが、筆者の当面の問題意識である。

人間の身体の存在構造から、エコノミー・エコシステムという問題系へと接近してゆくこと——この方向性に目印を与えるために名前を探すとすれば、それは「ホモ・エコノミクスの再定義」ということになるかもしれない。ホモ・エコノミクス（経済人）という語は、よく知られているように、近代経済学が想定する、あるいは要請する人間像を説明する——というより椰揄する——ために用いられている。それは個人の利益の最大化を目指して選択し行動する合理的個人を意味する。この語は、しばしば経済学が経済学という理論に適合するように人間という対象を独断的に裁断していることを示すために用いられている。しかし、経済人と訳されるような意味ではなく、「経済をもつヒト」という意味でこの言葉を再定義することが可能かもしれない。生命の生産と再生産にとって必須の物質やエネルギーの循環さえエコノミーのシステムによって媒介される人間にとって、エコノミーはおそらく人間の本質、あるいは定義に含まれると考えられるかもしれない。そうした人間の本質を表す語として、ホモ・エコノミクスを再定義することはできないだろうか。その可能性を模索することが、つぎの課題となるだろう。この課題に取りかかるには、とはいえ、稿を改めることが必要となる。

〔注〕

(1) 本稿は、二〇一二年七月二日に岩手大学で行なわれた岩手哲学会第四六回大会において、「緑のマルクス」と題して筆者がおこなった公開講演の原稿全文に大幅な加筆と修正を施したものである。当講演の内容については、すでに拙稿「緑のマルクス——物質代謝の思考にむけて」(『フィロソフィア・イワテ』第四四号、岩手哲学会、二〇一二年)において読むことができるが、この拙稿は講演の内容を半分程度に切り詰めたものであり、問題の広がりを感じようぶ

に伝えるものではない。あらたに本稿を執筆した所以である。

- (2) 馬淵浩二『世界はなぜマルクス化するのか——資本主義と生命』ナカニシヤ出版、二〇一二年。
- (3) 『岩波生物学辞典・第4版』岩波書店、一九九六年、「物質代謝」の項。
- (4) ちなみに、メタボリズムの語源であるギリシア語の *metabolismos* も変化や交換を意味する。参照、シュレーディンガー『生命とは何か』岡小天・鎮目恭夫訳、岩波文庫、二〇〇八年、一四〇頁。
- (5) *Marx Engels Gesamtausgabe*, II/6, S. 192. (カール・マルクス『資本論 第一巻』今村仁司他訳、『マルクス・コレクションIV』筑摩書房、二〇〇五年、二六三—二六四頁)。以下、『資本論』からの引用は新メガ版にもとづく。訳文は『資本論』第一巻については『マルクス・コレクション』のIV巻とV巻、『資本論』第三巻については、岩波文庫版を使用した。『マルクス・コレクション』では Stoffwechsel が新陳代謝と訳されているので、引用に際しては、すべて物質代謝に改めている。
- (6) MEGA, II/6, S. 76. (『マルクス・コレクションIV』六七頁)
- (7) *Ibid.* (同所)
- (8) 生態学的意味という表現は、フォスターから学んだ。以下を参照。Foster, J. B., *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, Monthly Review Press, 2000, p. 158. (J・B・フォスター『マルクスのエコロジー』渡辺景子訳、みすず書房、二〇〇四年、二五二頁)。
- (9) MEGA, II/15, S. 101. (岩波文庫版、第六分冊、一五六頁)
- (10) ティム・ハイワード『生態の思潮——エコロジーの政治』小倉武一訳、食料・農業政策研究センター国際部会、一九九六年、一六二頁。
- (11) MEGA, II/6, S. 129-130. (『マルクス・コレクションIV』一五七頁——訳文を変更した)
- (12) MEGA, II/6, S. 136. (同、一六〇頁)
- (13) MEGA, II/6, S. 172. (同、一七二頁)
- (14) MEGA, II/6, S. 197. (同、二七一頁)
- (15) 福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社現代新書、講談社、二〇〇七年、一六七頁。

- (16) ちなみに、物質代謝概念の由来については、シュミットがモレシヨットの名を挙げた。参照、A・シュミット『マルクスの自然概念』元浜晴海訳、法政大学出版局、一九七二年、八八頁。しかし、シュミットのモレシヨット説はおおくの批判にあった。こんにち優位にあるのは、いうまでもなくリービヒ説である。たとえば、フォスターを参照。Foster, *op. cit.*, p. ix. [邦訳「二二頁」]。以下も参照。Ibid., 160f. [邦訳「二五六頁以下」]。あるいは、椎名重明『農学の思想』東京大学出版会、一九七六年、二〇四―二〇五頁。
- (17) リービヒ『有機化学の農業及び生理学への応用』吉田武彦訳、北海道大学出版会、二〇〇七年。
- (18) MEGA, II/6, S. 477 ff. 325. [『マルクス・コルクシオンV』一九七頁、注三二五]
- (19) 椎名重明『農学の思想』一六頁。
- (20) 第二次農業革命については、フォスターを参考にした。「歴史家は今でも十七世紀から十八世紀にかけてイギリスで起こり、産業資本主義の基礎を築いた農業革命を唯一のものとすることが多いが、農業歴史学者は第二の、ときには第三の農業革命を口にすることがある。この考え方によれば、第一の革命は何世紀にもわたって起こった漸次的なプロセスで、囲い込みおよび市場の重要性の増大と結びついていた。そこでの技術的变化には肥料の改良、輪作、排水、家畜の管理が含まれる。これに対し、第二の農業革命はより短期間（一八三〇年から一八八〇年）に起こり、肥料産業の成長と、とりわけユストウス・フォン・リービヒの業績と関連した土壌化学の発展によって特徴付けられる。第三次農業革命はずっと後の二十世紀になって起こり、動物による牽引から機械牽引への置き換え、家畜の大規模な畜舎での飼育、植物の遺伝子操作（より限定された単一栽培を生み出した）、肥料や農薬といった化学的投入物のより集中的な使用を内容とつづる。」(Foster, *op. cit.*, p. 148f. [邦訳「二三八―二三九頁」]。)
- (21) Foster, *op. cit.*, p. 149f. [邦訳「二四〇頁」]。
- (22) リービヒ『有機化学の農業及び生理学への応用』八一頁。ローマ数字を漢数字に改めた。
- (23) MEGA, II/15, S. 101. [岩波文庫版、第六分冊、一五六頁]
- (24) MEGA, II/6, S. 476. [『マルクス・コルクシオンV』一九六頁]
- (25) MEGA, II/1, 2 S. 427. [『マルクス資本論草稿集——1857-58年の経済学草稿II』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、一九九七年、一九七頁]

- (26) 上野千鶴子『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの挑戦』岩波書店、二〇〇九年、九頁。
- (27) 玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』みすず書房、一九七八年。なお、本書では以下の著作集を参照している。
玉野井芳郎『玉野井芳郎著作集②——生命系の経済に向けて』学陽書房、一九九〇年。
- (28) 同書、二〇頁。「」内の補足は引用者による。
- (29) 同書、三四頁。
- (30) シュレーディングガー『生命とは何か』一四一頁。
- (31) 玉野井、前掲書、一五一一―一五二頁。
- (32) 同書、八八頁。
- (33) 同書、三一頁。
- (34) MEGA, II/6, S. 194. 『マルクス・コレクションIV』二六六頁)
- (35) 玉野井、前掲書、三八頁。
- (36) 同書、四二頁。
- (37) 玉野井に対する批判としては以下を参照。椎名重明『農学の思想』第5章・補論II。
- (38) Ernst Haeckel, *Generelle Morphologie der Organismen: Allgemeine Entwicklungsgeschichte der Organismen*, Berlin, 1866, S. 286.
- (39) マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』廣松渉編訳・小林昌人補訳、岩波文庫、二五―二六頁。編集記号は省略した。
- (40) 廣松渉『生態史観と唯物史観』講談社学術文庫、講談社、一九九一年、四五頁。さきほどのヘッケルのテクストでは、エコロジーは有機体とその環境のあいだの関係についての学であるが、ここで廣松はそれを動物に限定してしまっている。
- (41) 同書、一九四頁。
- (42) マルクス『ドイツ・イデオロギー』五六―五七頁。筆跡はマルクス。